

鹿児島県瀬戸内町与路方言の敬語形式*

重 野 裕 美**

1. はじめに

これまで琉球方言の中でも特に報告の少ない奄美方言¹⁾を対象として、敬語形式を体系化し、その機能や用法の全体像を解明することを試みてきた。調査の結果、与路方言の敬語形式やその運用法が他の奄美大島方言と比較して特異であることが判明した。本稿では、奄美諸島敬語法調査から得られた資料をもとに、当該地域の実態を報告する。具体的には、敬語の機能別、品詞別における敬語形式にはどのような形態素が用いられているのか、他の奄美大島方言の敬語形式との共通点・相違点は何かという点に着目しながらその特色を整理する。

2. 先行研究

奄美大島方言の敬語形式は、各地域の報告書や辞書で確認することができる²⁾。さらに、全国を対象とした調査からも、形式やその用法の一部を観察することができる³⁾。しかしながら、いずれも語彙の説明に留まっており、敬語形式の体系的な記述やその機能・運用法について整理されているものはほとんど見当たらない。

これまで、奄美大島龍郷町浦方言を中心としながら奄美方言敬語形式の体系化やその運用法の調査を進めてきた⁴⁾。浦方言についてはある程度記述がなされているが、他方言の記述は十分とは言えない。本稿では、奄美大島方言の中で

も他方言と異なる敬語形式が多い与路方言について詳述していく。

3. 調査の概要

ここでは、調査の対象地域、調査方法、文例の示し方について述べる。

3.1 対象地域

対象地域を、図1に市町村単位で示す。上から、奄美大島、加計呂麻島、請島、与路島、徳之島である。なお、本研究で「奄美大島方言」と言う場合、奄美大島だけではなく瀬戸内町の加計呂麻島、請島、与路島で話されている方言も含める。平成の大合併により、奄美大島の笠利町・名瀬市・住用村は奄美市となっている。説明の便宜上、合併前の市町村単位の区画を反映させ、考察を進める。奄美諸島は行政区画上鹿児島県に属するが、言語・文化等は沖縄本島を中心とする琉球文化圏に属する。本稿では、奄美方言の中でも、奄美大島の南部に位置する与路島の与路方言を対象とする。与路島は瀬戸内町に属している。北は奄美大島・加計呂麻島、東は請島、南は徳之島が位置している。周囲は18.4 km、面積は9.48 km²で、他の離島と同様、古生層山地が沈降してできた島である。山が海岸まで迫り、平地は集落の周辺以外には見られない。米作を主とした農業のほか漁業や牛の飼育も行われている。瀬戸内町の中心である古仁屋集落から1日1往復の町営定期船が出ている。集落は与路集落のみである⁵⁾。

与路方言は主に50歳代以上の方言話者が母語として使用している。人口は91人、世帯数は59

* 本研究は JSPS 科研費22520470「奄美諸島方言における社会構造の変容と方言敬語法の変容過程の研究」の助成を一部受けたものである。

** 広島経済大学経済学部助教



この地図の作成に当たっては、国土地理院長の承認を得て、同院発行の数値地図200000（地図画像）を使用したものである。（承認番号 平19総使、第82号）

図1 奄美大島・加計呂麻島・請島・与路島・徳之島の地図

世帯である（2013年10月末現在）。奄美方言は、他の琉球諸語と同様、世代間の伝承が断絶しており、2009年、UNESCO（国際連合教育科学文化機関）に消滅に瀕する危機言語として登録された。このことをきっかけに、さらに方言の記録・保存・継承の必要性が認識されるようになった。敬語形式を自由に採れるのは70歳代以上の方言話者である。いわゆる伝統方言が消えようとしている現在、敬語法は記述が急がれる分野の一つである。

3.2 調査方法

調査期間は2009年3月から2013年3月である。調査は面接調査で、現代日本語（以下、日本語と略す）による質問票を用意し、それを方言に翻訳してもらった。話者が聞き手、話題の人物との人間関係により、言語形式をどのように変化させるかを観察した。調査対象とした話者は、80歳男性（調査時）の与路方言話者である。両親共に与路集落出身者であり、話者の配偶者も与路出身の与路方言話者である⁶⁾。また、与路方言との比較のため他の奄美大島方言の例

を示すが、表1にあげた話者から得た資料を扱う。

表1 奄美大島調査の話者情報

島名	集落名	調査時年齢 (性別)	調査年月
奄美大島	笠利町 佐仁集落	81歳 (女性) 72歳 (男性)	2009年3月
	笠利町 笠利集落	86歳 (女性) 83歳 (女性)	2009年3月
	龍郷町 浦集落	80歳 (女性) 58歳 (男性)	2009年2月 2009年8月
	名瀬市 久里集落	83歳 (男性)	2009年3月
	住用村 城集落	80歳 (女性)	2009年8月
	大和村 大和浜集落	74歳 (男性)	2009年9月
	宇検村 湯湾集落	82歳 (男性) 75歳 (女性)	2009年3月
	瀬戸内町 古仁屋集落	71歳 (男性) 71歳 (男性) 50歳 (男性) 50歳 (男性)	2008年12月
与路島	瀬戸内町 与路集落	72歳 (男性)	2009年5月 2013年3月

3.3 「目上」「同等」「目下」の判断基準

話者はどのような基準で「目上」「同等」「目下」の判断をおこなっているのだろうか。重野(2012)では浦方言を対象として、人間関係による場面差が動詞の形態変化にどのような影響を与えるかを調査した。調査の結果、当該地域の「目上」「同等」「目下」の判断基準は年齢差が重視されていることが判明した。与路方言も浦方言と同様、敬語形式の運用に年齢差が最も影響を与える。もちろん、社会的地位や親疎関係の要因も敬語形式の運用に少なからず影響を与えるが、場面が複雑になるので本稿では扱わないこととする。

3.4 例文の示し方

例文は分節ごとに分かち書きを行い、1行目に国際音声字母(IPA表記)による音韻表記、2行目にグロス(文法的意味)をつけ、3行目に日本語による直訳または意識を記す。当該地域の方言に即した訳のため、日本語では非文または許容度が低い訳になる場合もある。「=」は接語境界、「-」は接辞境界を示す。また、例文には丸括弧で通し番号をつける⁷⁾。

4. 与路方言の敬語形式

本節では、他の奄美大島方言との比較をとおして与路方言の応答詞、人称代名詞、述部に認

められる敬語形式の整理を進める⁸⁾。述部に認められる形式については、敬語の機能別(尊敬語・謙讓語・丁寧語)、品詞別に形態素分析を行う。与路方言の敬語形式を尊敬・謙讓・丁寧の機能で分類すると、表2のように整理できる。

表より、丁寧専用の敬語動詞はなく、謙讓専用の敬語接辞もないことが分かる。

次に、表2に示した与路方言の敬語形式をさらに(a)敬語語根(本動詞的用法)と(c)敬語補助動詞(補助動詞的用法)に分ける。

(1) 敬語形式の型

- (a) 敬語語根
- (b) 敬語(派生)接辞
- (c) 敬語補助動詞

補助動詞の語頭には「#」を付け、敬語語根と敬語補助動詞の語根を表記上区別する¹⁰⁾。述部に認められる敬語形式に関しては、以上の分類基準を用いながら詳述していく(4.3節)。

4.1 応答詞

相手から「これを食べてもいいか」と聞かれて、「うん、いいよ」と肯定の返事をする際の応答詞は以下のとおりである。(2)は目上、(3)は目下に対する肯定の応答詞である。

(2) 話し手<聞き手

ʔoo.
はい
(はい。)

(3) 話し手>聞き手

tee.
はい
(はい。)

また、相手から何か言われて、再度その内容

表2 与路方言の述部に認められる敬語語根と敬語接辞

	語根	接辞
尊敬	ʔ ⁹⁾ oor- mosjor- wudum- toor-	-insjor
謙讓	ʔugam- weser- sirarer-	—
丁寧	—	-jaur -jauwer

を聞き返す際は目上に対して (4) に示した応答詞を用いる。目下には (5) のように日本語の「何」に対応する nuu という方言形が現われる。これは応答詞ではないが、目下に対する答え方として以下に示す。

- (4) 話し手<聞き手
woo nuu ar-jauweer=kai?
はい 何 コピュラ語幹-丁寧=疑問
(はい 何でしょうか。)
- (5) 話し手>聞き手
nuu?
何?
(何。)

目上に対する応答詞は肯定の場合は ?oo, 聞き返す場合は woo となり, 異なる形式を用いる。与路方言と同じく, 肯定の場合と聞き返す場合とで異なる応答詞を用いる集落は多い。また, これまでの調査から, 与路方言以外の奄美大島方言では, 目上に対する肯定の応答詞とし

て ?oo, 目下に対しては ?in が主に現われることが明らかとなっている。目上には ?oo 系を用いる点は他の奄美大島方言と共通しているが, 目下に対する応答詞として tee が現れるのは与路方言のみとなる。

以下, 奄美大島方言内における応答詞を比較する。目上・目下から「名前を呼ばれたとき」, 目上・目下の意見に対して「肯定するとき」, 目上・目下から何か言われたけれども聞き取れなかったため「聞き返すとき」, 目上・目下から何か頼まれ「承知するとき」の応答詞を, それぞれ表3・表4に示す。

表中で, 「一」は質問項目として設定していなかったこと, または質問項目として設定していたが調査の都合上質問を省いたことを意味する。一方, 「×」は質問したが, 意図した形式やそれに相当する形式が得られなかったこと, または話者が方言形にすることができなかったことを意味している。

金城(1931)では, 首里方言や那覇方言には身分によって言葉が士族と平民に分かれていた説明として, 応答詞を挙げている¹¹⁾。士族敬語

表3 目上に対する応答詞の地域差

集 落 名	応 答 詞			
	名前を呼ばれたとき	肯定するとき	聞き返すとき	承知するとき
笠利町 佐仁	hoo ?oo	?oo	hou	?oo
	?oo hai	?oo	×	?un
龍郷町 浦	?oo	?oo	?oo	?oo hai
名瀬 久里	hai	hai	×	hai
住用村 城	?hai	×	×	×
大和村 大和浜	?oo	—	hoo	?oo
宇検村 湯湾	hai	hai	×	hai
瀬戸内町 古仁屋	?oo hai	?oo	houu	?oo hai
	woo	?oo	woo	?oo

表4 目下に対する応答詞の地域差

集 落 名	応 答 詞			
	名前を呼ばれたとき	肯定するとき	聞き返すとき	承知するとき
笠利町 佐仁 手花部	ʔun	ʔun	ʔun	ʔun
	hai	ʔin	×	×
龍郷町 浦	ʔin hai	ʔin ʔun	ʔin ʔun	ʔin ʔun
	×	×	×	×
名瀬 久里	×	×	×	×
住用村 城	hai	×	×	×
大和村 大和浜	ʔin	—	ʔin	—
宇検村 湯湾	—	×	×	ʔun hai
瀬戸内町 古仁屋 与路	×	ʔun	×	hai
	×	tee	×	tee

が「ウー・フー」言葉、平民敬語が「オー・ホー」言葉と言われ、身分差が言語形式にも反映されていた。調査から、奄美大島方言では目下に対する肯定の応答詞として ʔoo, 目下に対しては ʔin があらわれることが明らかとなっている。この形式は、金城のあげた肯定する際の平民敬語の応答詞「オー」と「イー」と同語源と考えられる。さらに、回答例としては少ないが、返事をするときの平民敬語の応答詞である「ホー」に相当する hoo や hou も現われる。このことから、奄美大島方言でも、肯定の応答詞 ʔoo との使い分けが確認できる。一方、目下に対して返事をするときの応答詞である「ヒー」に相当する応答詞は現われず、肯定の ʔin が一貫してあらわれる。奄美大島では、平民敬語といわれる敬語形式が用いられていると言えよう。

与路方言のみに現われる応答詞 tee の語源に

ついては不明である。今後、他方言との比較研究を進めながら分析・解釈を試みたい。

4.2 人称代名詞

表5から人称代名詞は日本語と同様、指し示される人物により2人称代名詞を naam (敬称) と ʔoraa (親称) が区別されていることがわかる。性別による区別はない。また、1人称と3人称においては、待遇価値の異なる形態は認められない。

表6のように他の奄美大島方言と比較すると、目下への2人称代名詞に北部奄美大島と南部奄美大島における地域差が現われる。2人称代名詞は、北部奄美大島方言では j²aa, 南部奄美大島方言では ʔuraa や ʔoraa となり、形式における南北の違いが形式に反映される。

与路集落の話者から、目下への2人称代名詞

表5 与路方言の人称代名詞

人 称 代 名 詞							
1人称代名詞 「わたし」		2人称代名詞				3人称代名詞 「あいつ」	
		「あなた」		「おまえ」			
単数	複数	単数	複数	単数	複数	単数	複数
wan	waakja	naam	naakja	ʔoraa	ʔoraakja	ʔari	ʔatta

表6 奄美大島方言人称代名詞の地域差

集 落 名	人 称 代 名 詞					
	1 人 称 代 名 詞 「わたし」		2 人 称 代 名 詞 「おまえ」		3 人 称 代 名 詞 「あいつ」	
	単 数	複 数	単 数	複 数	単 数	複 数
笠利町 佐仁	wan	wakja	j [?] aa	j [?] akja	ʔakka ʔari	ʔasuta
	wan	wakja	j [?] aa	j [?] akja	—	ʔatta
龍郷町 浦	wan	wakja	j [?] aa	j [?] akja	ʔakka	ʔatta
名瀬 久里	wan	wakja	j [?] aa	j [?] akja	ʔakka	ʔatta
住用村 城	wan	wakja	j [?] aa	j [?] akja	ʔakka	ʔatta
大和村 大和浜	wan	wakja	j [?] aa	j [?] akja	ʔakka	ʔatta
宇検村 湯湾	wan	waakja	ʔuraa	ʔuraakja	ʔari	ʔatta
瀬戸内町 古仁屋	wan	waakja	ʔuraa	ʔuraakja	ʔari	ʔatta
	wan	waakja	ʔoraa	ʔoraakja	ʔari	ʔatta

について「ʔoraa はめったに使わない。よっぽど喧嘩をしたときの同等か5歳くらい年下の人に対して使うかもしれない。同等だと, naam「あなた」か共通語の ʔanta『アンタ』を使う」との教示を得ている。与路集落話者の「目上」「同等」「目下」による言語形式の使いわけは年齢の基準が優先であるが, 2人称代名詞に関しては naam の使用範囲が広いようである。基本的に目下には ʔuraa であるが, 「同等」や「年齢の近い目下」には中間形として方言の目上に対する naam や日本語の2人称代名詞 ʔanta を用いる。この運用法の違いも他の奄美大島方言と異なる点として特記できよう。

4.3 述部

ここでは, 述部に認められる敬語形式について, 丁寧, 尊敬, 謙譲の順にみていく。

4.3.1 丁寧形式

丁寧接辞は -jaur または -jauwer の形式が現われる。動詞・形容詞の語根もしくは語幹に後接する。名詞を丁寧形式にする場合は, コピュラ語根 dar- に丁寧接辞 -jaur/-jauwer を後接させて丁寧形式をつくる。

以下, 話し手が動作主で, 聞き手が話し手よりも (6) 目上, (7) 目下の場面の例を示す。

- (6) 動作主 = 話し手, 話し手 < 聞き手
ʔacjaa jaa=cci wur-jauwe=sukaa.
明日 家 = に 居る-丁寧 = けれども
(明日 家に 居りますけれども。)

- (7) 動作主 = 話し手, 話し手 > 聞き手
ʔacjaa jaa=cci wut-too.
明日 家 = に 居る-よ
(明日 家に 居るよ。)

以下, 奄美大島方言内の丁寧形式として, 動詞は ʔikjuri「行く」に後接する場合を, 名詞は hon「本」に後接する場合の例を示す。

奄美大島方言の丁寧形式からも, 北部奄美大島方言と南部奄美大島方言を大別することが可能である。北部の丁寧接辞は -jor であり, 南部は -joor と母音が長めに発音される。さらに, 与路集落では -jaur となる。動詞には動詞語幹に, 名詞にはコピュラ語幹に丁寧接辞が後接するこ

表7 奄美大島方言丁寧形式の地域差

集 落 名	動詞に後接 する場合 /ʔikjuri/ 「行く」	名詞に後接 する場合 /hon/ 「本」
笠利町 佐仁 手花部	ʔik-jor-i	hon dar-jor-i
	ʔik-jor-i	hon dar-jor-i
龍郷町 浦	ʔik-jor-i	hon dar-jor-i
名瀬 久里	ʔik-jor-i	hon dar-jor-i
住用村 城	ʔik-jor-i	hon dar-jor-i
大和村 大和浜	ʔik-jor-i	hon dar-jor-i
宇検村 湯湾	ʔik-joor-i ʔik-jaur-i	hon da-jor-i
瀬戸内町 古仁屋 与路	ʔik-joor-i	hon dar-joor-i
	ʔik-jaur	hon dar-jaur hon dar-auwer

とは共通している。

与路方言以外の奄美大島方言で用いられている丁寧接辞 jo(o)r の -o(o)- は -au- にさかのぼることができるのではないだろうか。そのように考えると、与路集落の -jaur は古い形式と考えられる。

(8) jaur → jo(o)r

丁寧接辞 jo(o)r は、もともと -jaur であるとするならば、丁寧接辞は ari 「有り」+wuri 「居り」が短縮したものとも考えられる。

現段階の調査資料では、通時的な現象についての考察を進めるには不十分である。今後、各集落の音韻体系や音韻規則を調査することで、jo(o)r と -jaur の関係を解明したい。

4.3.2 尊敬形式

与路方言の尊敬形式を、(a) 敬語語根、(b) 敬語（派生）接辞、(c) 敬語補助動詞の3つに分けると以下のとおりになる。

(a) 敬語語根

ʔoor- (行く・来る・居る・言う)

mosjor- (食べる・飲む)

wudum- (起きる)

toor- (くれる)

(b) 敬語（派生）接辞

-insjoor

(c) 補助動詞

#oor-

尊敬動詞は、ʔoor-, mosjor-, wudum-, toor- の4語である。目上の動作主の行為に対して用いられる。ʔoor- は「行く」「来る」「居る」「言う」の意味の尊敬動詞である。(9) のように、尊敬語動詞を命令形にして目上に用いることができる。

(9) 動作主=聞き手=目上、話し手<聞き手

kan ʔoor-e.

ここ 来る. 尊敬- 命令

(ここ (に) いらっしゃれ。)

#oor- は共通語の「~いらっしゃる」に相当するアスペクトの尊敬語補助動詞として用いられる。日本語では同種の敬語形式を重ねると二重敬語として非文となるが、与路方言では(10)のように許容される。この用法は他の奄美大島方言でも用いられる。

(10) 動作主=聞き手=目上、話し手<聞き手

ʔacjaa nasjee=cci ʔoo-ci

#oor-e=joo.

明日 名瀬=に 行く. 尊敬- 接続

来る. 尊敬- 命令=よ

(明日 名瀬に いらっしゃって

表 8 奄美大島方言尊敬形式の地域差

集 落 名	(a) 尊 敬 語 根		(b) 尊 敬 接 辞		(c) 尊 敬 補 助 動 詞	
	いらっしゃる	召しあがる	お目覚めになる	なさる	いらっしゃる	くださる
笠利町 佐仁 手花部	?oor-	misjor-	wuzum-	-insjor	#oor-	×
	?imor-	misjor-	—	-insjor	#mor-	×
龍郷町 浦	m ² or-	misjor-	wuzum-	-insjor	#mor-	×
名瀬 久里	?imor- ?imor-	misjor-	wuzum-	-insjor	#mor-	×
住用村 城	?imor-	misjor-	—	-insjor	#mor- #imor-	×
大和村 大和浜	?imor-	misjor-	×	-insjor -insjorur	#mor-	×
宇検村 湯湾	?umoor-	misjoor-	wuzum-	-insjoor	#moo-	taboor-
瀬戸内町 古仁屋 与路	?umoor- ?omoor-	misjor-	—	-insjoor	#moo- #umoor-	tabor-
	?oor-	mosjor-	wudum-	-insjoor	#oor-	toor-

尊敬接辞 -insjor も尊敬動詞同様、命令形にすることが可能である。

以下、奄美大島方言内の尊敬形式を (a) 尊敬語根, (b) 尊敬接辞, (c) 尊敬補助動詞に分けて示す。

奄美大島方言では、敬語形式が日本語と比べ少なく、語の承接規則も二重敬語が許されるなど比較的自由である。表 8 から、尊敬語根では wudum- (お目覚めになる) が衰退しつつあることが指摘できる。また、授受動詞の尊敬動詞 tabo(o)r-/toor- の分布状況が北部と南部の地域差として現われることも分かる。南部奄美大島方言には授受動詞の尊敬動詞が存在するが、北部では見当たらない。北部では授受動詞の尊敬動詞のかわりに、非敬語動詞 kurer- 「くれる」に尊敬接辞 -insjor を後接させた kur-insjor-i が用いられる。

与路方言に着目すると ?oor- や toor- が奄美大島方言内では特異な形式であることが分かる。一方、日本語の「いらっしゃる」に相当する形式では、与路集落とは遠く離れた奄美大島の最北端に位置する佐仁集落と同形であることも特

記すべき点である。同形とは言え、それぞれの形式の語源については不明な点が多いので、今後、調査を重ねた上で分析を試みたい。

4.3.3 謙讓形式

謙讓語動詞には、wesor-, ?ugam-, sirarer- がある。wesor- は日本語の「さしあげる」に相当し、授受動詞の謙讓語動詞である。?ugam- は「会う」の意味の謙讓語動詞である。sirarer- は「言う」の意味の謙讓語動詞である。

与路方言の謙讓形式を、(a) 敬語語根, (b) 敬語 (派生) 接辞, (c) 敬語補助動詞の 3 つに分けると以下のとおりになる。尊敬形式とは異なり、(b) 敬語 (派生) 接辞に相当する形式は見当たらない。?wesor- は補助動詞としても用いられる。

(a) 敬語語根

wesor- (あげる・やる)

?ugam- (会う)

sirarer- (言う)

(b) 敬語 (派生) 接辞

- (c) 補助動詞
#weser-

ある-丁寧 = けれども
(あなたに 申しあげたいことが
ありますけれども。)

以下に、動作主が話し手で、聞き手が目上の
場面における例を weser-, ʔugam-, sirarer- の
順に示す。

- (17) 動作主 = 話し手, 話し手 < 聞き手
kUN hON weser-jau=sukaa.
この 本 あげる. 謙譲-丁寧. 非
過去 = けれども
(この 本 さしあげますけれど
も。)

- (18) 動作主 = 話し手, 話し手 < 聞き手
ʔuga-N duu-sar-ee-taa.
会う. 謙譲-連体 遠い-サ語幹-丁
寧-過去
(お久しぶりでした。)

- (19) 動作主 = 話し手, 話し手 < 聞き手
naamee sirare-busjaamu-N=ga
ʔar-jaauwe=sukaa.
2 人称. 尊敬. に 言う. 謙譲-希望.
名詞化-連体 = が

謙譲動詞は以上の weser-, ʔugam-, sirarer-
である。尊敬形式とは異なり、謙譲の機能を
担った専用の(派生)接辞はない。そのため、
話し手や目下の行為・状態を目上の聞き手へ伝
えたい場合は、(20) のように丁寧形式で対応す
る。

- (20) 動作主 = 話し手, 話し手 < 聞き手
wan=ga s-jauwed-doo.
私 = が する-丁寧-よ
(私が しますよ。)

#weser- は日本語の「〜てさしあげる」に相
当する謙譲の補助動詞である。日本語では授受
動詞の補助動詞的用法は「恩恵」のニュアンス
が付加されるため許容度が低い。与路方言を
含む奄美大島方言内では(21) のように違和感
なく用いられる。

- (21) 動作主 = 話し手, 話し手 < 聞き手
wan=ga nimocu mu-cci

表 9 奄美大島方言謙譲形式の地域差

集 落 名	(a) 謙 譲 語 根			(c) 謙譲補助動詞
	さしあげる	拝 む	申しあげる	さしあげる
笠利町 佐仁 手花部	ʔosur-	ʔugam-	×	×
	ʔoser-	ʔugam-	×	#osur-
龍郷町 浦	ʔoser-	ʔugam-	sirarer-	#osur-
名瀬 久里	ʔoser-	ʔugam-	×	#osur-
住用村 城	ʔoser-	ʔugam-	×	×
大和村 大和浜	ʔosur-	ʔogam-	sirarer-	×
宇検村 湯湾	ʔwese-	ʔugam-	×	×
瀬戸内町 古仁屋 与路	ʔwees-	ʔugam-	×	×
	ʔwese-	ʔugam-	sirarer-	#weser-

wes-jauwer-oo.

私＝が 荷物 持つ-継続
あげる. 謙譲-丁寧-意志
(私が あなたの 荷物 (を) 持つ
て さしあげましょう。)

以下、奄美大島方言内の謙譲形式を (a) 謙譲語根, (c) 謙譲補助動詞に分けて示す。

謙譲語の形式は, (a) 謙譲語根と (c) 謙譲補助動詞のみであり, (b) の謙譲語接辞は存在しない。謙譲語根は各集落で日本語の「さしあげる」や「拝む」に相当する形式は安定して取り出せる。しかし, 「拝む」は慣習化したあいさつ表現のみに残存しており, 会話文ではほとんど現われない。また, 「言う」の謙譲語である「申し上げる」に相当する形式は, 奄美大島方言内において衰退しつつある形式であることが分かる。

5. まとめと今後の展開

本稿では, 与路方言の敬語法について人間関係の差異による敬語形式の使い分けに着目しながら詳述してきた (4 節)。与路方言の敬語形式と他方言と比較した場合に与路方言のみに認められる特徴を以下に整理する。

《応答詞》

- ・ 応答詞では, 目上と目下, 「肯定するとき」「承知するとき」と「名前を呼ばれたとき」「聞き返すとき」で応答詞の形式上の区別がある。
- ・ 目下に対する応答詞として与路方言のみ tee を用いる。

《人称代名詞》

- ・ 聞き手が目上か目下かで形式に変化が現われるのは, 2人称代名詞と3人称代名詞である。
- ・ 目下に対する2人称代名詞は南部奄美大島方言に分布している ?uraa と同語源と考え

られるが, ?uraa という形式は与路方言のみにみられる。

《述部》

- ・ 与路方言も他の奄美大島方言と同様, 敬語形式を次の3形式に分類することができる。

(a) 敬語語根

(b) 敬語 (派生) 接辞

(c) 敬語補助動詞

- ・ 尊敬形式の ?oor- や toor-, 丁寧語-jaur, -jauwer など与路方言にのみ現われる形式が存在する。
- ・ 次の例のように尊敬動詞の命令形が許容される点, (c) の組み合わせによる敬語語根の二重敬語が許容される点は他の奄美大島方言の特徴と共通している。

?oo-ci#oor-e

行く. 尊敬-接続#来る. 尊敬-命令

- ・ 「食べる」の意味に関しては, 非敬語動詞の kam- は目下には使えず, 動物に対してのみ使用する。他の奄美大島方言内では幼い子どもへの親愛表現に相当する bo- とともに kam- も用いる。運用法の違いが認められる。

以上, 他の奄美大島方言との比較をとおして, 与路方言の敬語形式を整理した。敬語形式の体系やその用法はある程度共通しているものの, 与路方言のみの形式も多い。与路方言をはじめとする奄美大島方言内の詳細は文法記述を踏まえた上で解釈を進める必要がある。奄美大島方言のみではなく, 琉球方言の敬語法全体を見渡せるような言語運用実態の解明を試みることで, 周辺方言, 周辺言語との比較研究へと発展するための基礎的資料としたい。

注

- 1) 喜界島・奄美大島・加計呂麻島・請島・与路島・徳之島・沖永良部島・与論島などの奄美諸島全体で話されている方言の総称を本稿では「奄美方言」とよぶ。奄美大島とその属島である加計路

麻島・請島・与路島で話されている方言を総称する場合は「奄美大島方言」とし、「奄美方言」とは区別する。

- 2) 長田 (1980), 寺師 (1981), (1985), 柴田 [編] (1984), 高江洲 (2009) など。
- 3) 『全国方言資料』(1972), 『方言敬語法の研究』(1978-79), 『方言文法全国地図』(2006) など。
- 4) 重野 2009, 2010a, 2010b, 2011, 2012 など。
- 5) 与路集落の地理的状況については『角川日本地名大辞典 46 鹿児島県』(p. 891) 参照。
- 6) 話者の居住歴は次のとおりである。0歳-18歳(鹿児島県大島郡瀬戸内町与路集落), 19歳-21歳(沖縄), 22歳-現在(鹿児島県大島郡瀬戸内町与路集落)。
- 7) 例文表記は、『言語研究』(日本言語学会: 編集・発行)の「執筆要領」に準じている。
- 8) 奄美大島方言にも現代日本語の「御」に相当する接辞 /u-/ の敬語形式が存在する。与路方言においても同じ接辞があると考えられるが, 現段階では調査が不十分である。本稿では接頭辞に認められる敬語形式については言及しない。
- 9) この音は子音の一つで, 「声門閉鎖音(グロッタル・ストップ)」もしくは「声門破裂音」とよばれる。国際音声字母では「ʔ」と記述される。声門閉鎖音は声を出す前にのどにある声帯を閉じ, 肺からの空気を一時的に遮断するときにつくられる音である。対象地域では母音の前に常に声門閉鎖音がたつ(例: ʔoo 「はい」)。また, 他の子音を発音するときに, 喉頭もしくは声門を閉じるか狭めると, 声門閉鎖音と同様, 聴覚印象では「硬い音」に聞こえる。このような子音は, 「喉頭化子音」とよばれる。喉頭化子音はその子音の右肩に小さくした「ʔ」をつけて表記する(例: kʔwa 「子ども」)。対象地域では, 声門閉鎖音や喉頭化子音の有無が意味の区別に使われる。(例: ʔutu 「音」と wutu 「夫」, wa 「輪」と wʔa 「豚」)。
- 10) 補助動詞の語頭の前に「#」を付ける案は, 風間(1992)の例文表記法を参照している。
- 11) 首里・那覇の口語は普通三種に使い分けられてゐて, 「ウー・フー」言葉「オー・ホー」言葉「イー・ヒー」言葉の三つが之であつて, 前二者が所謂敬語で最後のものは対稱又は卑稱にあたる。これら三種の言葉が, 年齢, 階級, 性別によつて厳格に使ひ分けられるのである。
註。「ウー」「オー」「イー」は肯定の場合の日本の「はい」にあたり, 「フー」「ホー」「ヒー」は返事して答へる場合の「はい」に當る。首里那覇では敬語を使ふ事を普通「ウー・フー」と云つてゐる。(金城 [1931: 69] より引用)

参 考 文 献

- 上村幸雄 (1992) 「琉球列島の言語」『言語学大辞典 第4巻 世界言語編』三省堂, pp. 771-891
- 長田須磨・須山名保子・藤井美佐子 (1980) 『奄美方言分類辞典 下巻』笠間書院
- 風間伸次郎 (1992) 「第11章 接尾型言語の動詞複合体について: 日本語を中心として」宮岡伯人 [編] 『北の言語: 類型と歴史』三省堂, pp. 241-260
- 「角川日本地名大辞典」編集委員会 (1983) 『角川日本地名大辞典 46 鹿児島県』角川書店
- 国立国語研究所 [編] (2006) 『方言文法全国地図 第6集』国立印刷局
- 金城朝永他 (1931) 「南島方言に於ける敬語法(第2回例会記録)」『旅と伝説』5-2, pp. 69-74
- 重野裕美 (2009) 「奄美大島龍郷町浦方言の敬語動詞 [ʔimori] の世代差・意味差に関する研究」, 『広島大学大学院教育学研究科紀要』, 第58号, 第二部, pp. 213-218
- 重野裕美 (2010a) 「奄美諸島方言の敬語法—敬語形式の分布とその展開に着目して—」, 『國學攷』, 第208号, pp. (1)-(18), 広島大学国語国文学会
- 重野裕美 (2010b) 「奄美大島龍郷町浦方言の敬語法—全国共通語敬語法との比較を通して—」, 『広島大学大学院教育学研究科紀要』, 第59号, 第二部, pp. 279-288, 広島大学大学院教育学研究科
- 重野裕美 (2011) 『奄美諸島方言敬語法の記述的研究』, 広島大学大学院教育学研究科提出, 博士論文
- 重野裕美 (2012) 「奄美大島龍郷町浦方言の丁寧語」, 『広島大学日本語教育研究』, 第22号, pp. 9-16, 広島大学大学院教育学研究科
- 柴田 武 [編] 『奄美大島のことば—分布から歴史へ—』秋山書店
- 高江洲頼子 [編] (2009) 『琉球語諸, 方言形容詞の形態論に関する調査・研究 平成16年度~平成19年度科学研究費補助金(基盤研究(B) 研究報告書)』沖縄大学人文学部
- 寺師忠夫 (1981) 『奄美方言の研究』自家出版
- 寺師忠夫 (1985) 『奄美方言, その音韻と文法』根元書房
- 日本放送協会 [編] (1972) 『全国方言資料 第10巻 琉球編 I』日本放送出版協会
- 藤原与一 (1978) 『昭和日本語方言の総合的研究第一巻 方言敬語法の研究』春陽堂
- 藤原与一 (1979) 『昭和日本語方言の総合的研究第二巻 方言敬語法の研究続篇』春陽堂